

第17冊・第37回（上）

『仏教抹殺』

～なぜ明治維新は寺院を破壊したのか～

鵜飼秀徳、文春新書

はじめに

突然ですが、あなたは日本が好きですか？日本という国に誇りを持っていますか？

私は、この問いに「もちろんです」と答えます。四季織りなす美しい自然や風土の中を歩けば心が癒やされ活力がわきます。日本料理も美味しくて、「日本に生まれて良かったなあ」と思うことがしばしばあります。火山の噴火や地震・津波などの自然災害は困りますが、その反面、日本各地に温泉が湧き、心身の疲れを癒やしリフレッシュすることができます。

「日本が世界で一番！」とは思いませんが、日本の歴史も、自然や風土、そしてその日本に住む人々の大半は「良心的」な「いい人」だと感じる人が多いです。

しかしです。今、「日本の歴史」と書きましたが、歴史をたどっていくと信じられない事件や出来事があります。「日本（日本人）がほんとにこんなことしたん?!」と信じがたいこと、心が押しつぶされそうになることも、残念ながらあります。

また、「日本人って熱しやすく冷めやすいなあ」と残念に思うことがあります。ある時期に、「誰かに洗脳されてしまった」ような日本人が「気が狂ったかのような」問題行動を起こしてしまうのです。

例えば、江戸時代の末期に起きた「**尊王攘夷**」運動、関東大震災直後の混乱した時期に起きた「**朝鮮人虐殺**」などの事件は、まるで「得体の知れないウイルスに侵されてしまった民衆が発狂」したかのようです。



井上亮氏の『熱風の日本史』（日本経済新聞社）の中で、次のようなことが書かれています。

明治維新时期、日本の知識人たちが「漢字を捨てて英語（アルファベット）を国語（公用語）にしよう」（初代文部大臣森有礼など）と「わけのわからないこと」を言い出します。アジア・太平洋戦争（大東亜戦争）に負けてGHQに占領された頃にも同じようなことが起こりました。

これは「欧化主義」や「英語コンプレックス」というウイルスに侵されてしまった一部の日本人が起こした「問題行動」です。

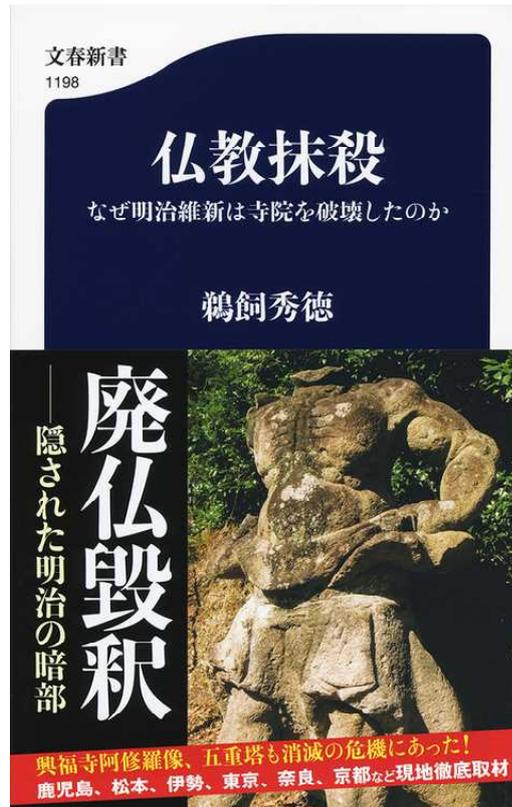
さらに、明治維新时期には「優等民族である西洋人と劣等民族の日本人が結婚し、優れた子孫を残すべし」という「日本人種改良論」も出てきました。ちなみに、高橋義雄の著した『日本人種改良論』の序論には、1万円札の肖像や『学問のすすめ』で有名な福沢諭吉が序論を書いているそうです。

「日中戦争」や「アジア・太平洋戦争（大東亜戦争）」などもそうですが、「日本人がいかに馬鹿だったのか」「どうしてそんなアホなことをしたのか」と考えさせられます。

そこで、日本を愛する者として、今回は「廃仏毀釈」について学んでいきたいと思えます。今回取り上げるのは、『仏教抹殺～なぜ明治維新は寺院を破壊したのか～』です。

テーマは「廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）」。日本中で仏像・仏画、寺院が破壊・焼却されて日本の伝統である「神仏習俗」の習慣が完全に息の根を止められてしまった事件です。

なぜ、「廃仏毀釈」かということ、私は「神社仏閣」や「仏像」が大好きだからです。そして、その寺院や仏像などが破却された「廃仏毀釈」について許せない気持ちがあるからです。「なんで、タリバンのように仏像や寺院を破壊したのか？」知りたいからです。「熱風の嵐」に侵されてしまった日本人の意識・感情を理解したいのです。



著者の紹介

『[仏教抹殺～なぜ明治維新は寺院を破壊したのか～](#)』の中身に入る前に、まず著者である鶴飼秀徳氏について紹介していきましょう。なお、著者紹介については、『[ウィキペディア \(Wikipedia\)](#)』を参考にさせてもらっています。

鶴飼秀徳氏は1974年に京都市右京区嵯峨野の浄土宗正覚寺でお生まれになりました。ということは、今年（2022年）48歳になります。ということは寅年の年男なんですね。大学卒業後、報知新聞社に入社、その後、日経BP社に移籍され、日経ビジネス記者、日経おとなのOFF副編集長などを歴任されました。

『[寺院消滅 失われる「地方」と「宗教」](#)』（日経BP）、『[仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか](#)』（文藝春秋）がベストセラーになり、2018年に退社され、同年、一般社団法人良いお寺研究会代表理事に就任されました。

また、寺院を「社会資本」と捉え、地域創生に結びつける活動を続けておられます。なお、凸版印刷などの企業顧問も務めているそうです。

ですから、鶴飼秀徳氏はジャーナリストであり、作家であり、また浄土宗の僧侶（正覚寺住職）ということなんですね。

さて、鵜飼秀徳氏の著書もいくつか紹介しておきましょう。

『寺院消滅 失われる「地方」と「宗教」』（日経BP社、2015年）
『無葬社会 彷徨う遺体 変わる仏教』（日経BP社、2016年）
『ペットと葬式 - 日本人の供養心をさぐる-』（朝日新聞出版、2018年）
『仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか』（文藝春秋、2018年）
『ビジネスに活かす教養としての仏教』（PHP研究所、2019年）
『仏具とノーベル賞 京都・島津製作所創業伝』（朝日新聞出版、2020年）
『お寺の日本地図 名刹古刹でめぐる47都道府県』（文藝春秋、2021年）

また、鵜飼秀徳氏のインタビューや論文などが掲載された雑誌も発刊されています。

【毎日新聞社】2015年12月23日付「そこが聞きたい 神社仏閣の消滅危機 鵜飼秀徳氏」

【文藝春秋オピニオン 2016年の論点】『『寺院消滅』が止まらない』

【読売新聞社】2016年2月16日「減る檀家 増える空き寺 定年退職者の僧侶育成も」

【毎日新聞社】2017年1月14日「人模様 近著『無葬社会』が話題に 鵜飼秀徳さん」

【福井新聞社】2017年5月16日 「鵜飼秀徳さんに聞く 弱者に希望を与えて」

【京都新聞社】2018年12月4日 「ペット葬の源流をさぐる」

【日本経済新聞社】2019年2月2日 「日本史ひと模様」

【週刊文春】2019年6月27日号 「記者から僧侶に」

【北海道新聞】2019年9月13日 「各自各論 仏教界とLGBT」

【中外日報社】2019年9月24日 「寺院消滅から寺院蘇生へ」

【読売新聞社】2019年10月6日 「きょう人十色 寺院、企業とつなぎ再生」

【Voice】2020年3月 「仏教から学ぶ幸せな定年生活」

【朝日新聞社】2020年12月31日「京都で起こす 仏具商からノーベル賞へ」

【文藝春秋オピニオン 2021年の論点】「仏教はコロナ禍の絶望を救えたのか」

さらに、鵜飼秀徳氏はテレビやラジオのメディアにも出演されています。

「さらピン!キョウト(木曜)」 レギュラーコメンテーター KBS京都ラジオ

「モーニングバード」テレビ朝日

「Nikkei プラス10」BSテレ東

「あさちゃん!」TBS

「ビートたけしのTVタックル」テレビ朝日

「中西哲生のクロノス」FM東京

「ゆうがたサテライト」テレビ東京

「ラジオ深夜便」NHKラジオ第一

「クローズアップ現代+」NHK総合

「かんさい熱視線」NHK総合

「廃仏毀釈」とは

さて、そもそも**廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）**とは何でしょうか？

「廃仏」とは仏法を廃（破壊）すること。「毀釈」とは、釈迦（釈尊）の教えを壊（毀）・棄却するということ。従って、廃仏毀釈とは、仏教寺院・仏像・経巻などを破毀（破棄）＝捨て去り、釈迦の教えを棄却して仏教を廃することを意味します。

明治維新の初期に、日本中がまるでウイルスに冒されたかのように、寺院や仏像などを破壊・焼却するという蛮行が行われました。鹿児島県では寺院がすべて無くなってしまいました。京都や奈良のような寺社勢力が強いと思われる地域でも、信じられないような破壊活動が行われていきました。

そのような破壊活動は1870（明治3）年頃にピークを迎え、断続的に1876（明治9）年頃まで続きました。ある日突然発生し、なぜか数年で終わってしまいました。

なぜ、廃仏毀釈が行われたのでしょうか？どのようにして廃仏毀釈が行われていったのでしょうか？そして、明治維新と言えば薩摩や長州が中心になって行われた時代ですから薩長ではどのような廃仏毀釈が行われたのでしょうか？また、京都や奈良のような多くの寺院がある府県ではどのような様子だったのでしょうか？

また、廃仏毀釈は「悪いこと」ばかりだったのでしょうか？今の私たちにとって「良いこと」は無かったのでしょうか？

これらの疑問に答えてくれるのが**鶴飼秀徳氏の『仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか』（文藝春秋）**です。それでは、本論に入っていきます。



教科書や資料などに登場する廃仏毀釈の絵

「神仏分離令」がきっかけ

物事には、「はじめ」と「終わり」があります。廃仏毀釈という仏教抹殺の破壊活動の「はじめ」は、明治新政府が出した「神仏分離令」でした。

鵜飼秀徳氏は『仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか』のなかで、次のように記しています。

明治維新という物語は、どのページをめくっても、美談ばかりが語られる。しかし、華やかな歴史の影に、目も覆わんばかりの痛ましい事実が隠されていたのである。……。明治維新150年は同時に廃仏毀釈150年でもあるのだ。

NHKの大河ドラマなどを見ていると、明治維新によって日本は欧米の帝国主義諸国によって植民地になってしまう危機を回避し、欧米列強諸国と肩を並べていく出発点になった時代として華々しく描かれることが多いです。

昨年の大河ドラマ『青天を衝く』でも尊王攘夷にかぶれていた青年**渋沢栄一**が一橋家の家臣になり、パリ万博に行き世界を目の当たりにし、はじめは明治新政府のなかで、のちには民間人として日本の経済発展をリードしていく人生を描いていました。

多くの日本人が「明治維新は良かったこと」と思っているような気がします。ところが、鵜飼秀徳氏は「明治維新150年は廃仏毀釈150年」だと、断定しているのです。「目も覆わんばかりの痛ましい事実が隠されている」と怒っておられます。

続きを見ていきましょう。

廃仏毀釈とは何か簡単に説明しよう。

日本の宗教は、世界の宗教史の中でも特殊な形態を辿ってきた。中世以降江戸時代まで、**神道と仏教がごちゃまぜ（混淆宗教）**になっていたのである。祈祷もするし、念仏も唱えるし、祓も、雨乞いもする。寺と神社が同じ境内地に共存するのも当たり前。神に祈るべき天皇が出家し、寺の住職を務めた時代も長かった。

このように、日本では実におおらかな宗教風土が醸成されてきたのだ。

しかし、明治維新を迎えた時、日本の宗教は大きな節目を迎える。

新政府は万民を統制するために、強力な精神的支柱が必要と考えた。そこで、**王政復古、祭政一致**の国づくりを掲げ、純然たる神道国家（天皇中心国家）を目指した。この時、邪魔な存在だったのが神道と混じり合っていた仏教であった。

新政府は神と仏を切り分けよ、という法令（神仏分離令）を出し、神社に祀られていた仏像・仏具などを排斥。神社に従事していた僧侶に還俗を迫り、葬式の神葬祭への切り替えなどを命じた。

この時点では、**新政府が打ち出したのはあくまでも神と仏の分離であり、寺院の破壊を命じたわけではなかった。**だが、時の為政者や市民の中から、神仏分離の方

針を拡大解釈する者が現れた。そして彼らは、仏教に関連する施設や慣習などをことごとく壊していった。これが廃仏毀釈の概要である。

ここで押さえておかなければならないのは「仏教抹殺の破壊活動を明治政府が先導したわけではない」ということです。政府が命じたのは「神と仏の分離」であり、寺院や仏像の破壊や焼却ではありませんでした。

しかし、それが、ある人々によって「仏教に関する施設や慣習などをことごとく壊」していく仏教抹殺の破壊活動へと「発展」して行くことになってしまいました。

今、私は「ある人々」と書きましたが、それはどんな人々なのでしょう？おいおい、明らかにしていきます。

ところで、廃仏毀釈が日本中で行われたのは事実ですが、地域によっては破壊活動が激しかったところとそうでないところがあります。中でも廃仏毀釈が激しかった地域は、**水戸・佐渡・松本・苗木（岐阜）・伊勢・土佐・宮崎・鹿児島**などです。これらの地域では徹底的に寺院が破壊されてしまいました。

これらの地域の廃仏毀釈の背景、目的、やり方などは同じではありません。むしろ、それぞれ違います。苗木・隠岐・鹿児島では寺院と僧侶が地域から完全に消えてしまいました。

その時から150年が経過した現在でも、廃仏毀釈の痕跡はあちこちに残っています。廃仏運動が激しかった地域では、寺院の数が異様に少なかったり首がはねられた地蔵が路傍に転がっていたりします。

例えば、宮崎や苗木での葬式は、今でも仏式ではなく神葬祭で執り行われています。それが、ごく当たり前になっているのです。



阿修羅像



無著・世親像

『仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか』をもう少しみましょう。

それは文化財と歴史の破壊でもあった。2017（平成29）年秋、東京国立博物館で「特別展運慶」が開催され、期間中の入場者数は60万人を超える大ヒット展示会となった。この特別展は奈良、興福寺の中金堂再建記念として開催されたもので、同寺から多数の仏像の出品があった。

入場まで2時間以上も待ち、国宝「無著・世親菩薩立像」の前に立った時、まるで命が宿っているようなリアリズムを持って迫るその姿に、私は感動を禁じ得なかった。

しかし多くの人には知らないのだ。

明治初期、無著・世親像は、あの美しき阿修羅像たちとともに、ゴミ同然の扱いで中金堂の隅に乱暴に捨て置かれていたことを。この時、阿修羅像は腕が二本欠け落ちてしまった。興福寺などの古刹で、天平時代の古仏も含む多くの仏像が焚き火の薪にされてしまった。無著・世親像や阿修羅像すら、燃やされる可能性があったのである。

また、運慶の展示品の中に、保有者が伝統仏教の寺院ではなく新宗教団体であるものがあった。廃仏毀釈時、多くの寺宝が売却され、国内外に散逸してしまったからだ。2014（平成26）年ニューヨークで開かれたクリスティーズのオークションで、ある仏像が出品されたことが話題になった。それは、興福寺に安置されていた「乾漆十大弟子立像」を構成する一体であった。現在、同寺に残る十大弟子立像は六体のみ。いずれも国宝に指定されているが、残る四体は廃仏毀釈時に散逸した。それが近年、海外で発見され、オークションにかけられたのだ。

廃仏毀釈によって日本の寺院は少なくとも半減し、多くの仏像が消えた。哲学者の梅原猛氏は、廃仏毀釈がなければ国宝の数はゆうに3倍はあっただろう、と指摘している。

国の財産が失われただけではない。廃仏毀釈は日本人の心も壊した。

何百年にも渡って仏餉（ぶっしょう、仏前に供える米飯）を供え続け、手を合わせ続けた仏に対し、ある時、日本人は鉄槌を下したのである。僧侶自らが率先して、神職への転職を申し出て、本尊を斧で叩き割った事例も見られた。

2001年タリバンがバーミヤンの磨崖仏（まがいぶつ）を爆破した映像は記憶に新しい。なんとという恐れ知らずの野蛮な行為なのか、と世界中の人々が憤慨した。だが、同様の行為を、明治の日本人も行っていたのである。

鵜飼秀徳氏は、廃仏毀釈という蛮行が寺院や仏像などを破壊しただけではなく、「日本人の心も壊し」たと言っているのです。タリバンが行った有名な仏像破壊という行為は当時世界中から非難されましたが、明治の日本人はタリバンと同じ行為をしていたと悲憤しておられます。

松岡正剛氏もホームページ『松岡正剛の千夜千冊』の佐伯恵達『廃仏毀釈100年』の紹介 (<https://1000ya.isis.ne.jp/1185.html>) のなかで、次のように述べておられます。

明治維新における「神仏分離」と「廃仏毀釈」（はいぶつきしゃく）の断行は、取り返しのつかないほどの失敗だった。いや、失敗というよりも「大きな過ち」といったほうがいいだろう。日本を読みまちがえたとしか思えない。「日本という方法」をまちがえたミスリードだった。

日本をいちがいに千年の国とか二千年の歴史とかとはよべないが、その流れの大半にはあきらかに「神仏習合」ないしは「神仏並存」という特徴があらわれてきた。神と仏は分かちがたく、寺院に神社が寄り添い、神社に仏像がおかれることもしょっちゅうだった。そもそも9世紀には“神宮寺”がたくさんできていた。……

その神仏習合を鉋で割るように「神と仏」に分断して、制度においても神仏分離した。これは過誤である。ミスリードだ。神道各家や仏教諸派がこのような主張をすることは、いっこうにかまわない。宗教宗派とはそういうものだ。ときに神を争い、仏を取り合うこともある。しかしながら、日本という国家が神道と仏教を分断する必要などまったくなかった。まして廃仏毀釈はよろしくない。

「取り返しのつかないほどの失敗」「失敗というよりも大きな過ち」と松岡正剛氏は嘆いておられます。私もまったく同感です。特に「仏像破壊」「寺院焼却」などの蛮行は寺好き・仏像好きな私から見れば、話にならない蛮行です。あ、私は神社も大好きです。

さらに松岡正剛氏は次のようなことも述べておられます。

なぜこのようなことがおこったかということについては、いろいろの分析が可能だ。徳川時代の全般をふりかえる必要があるし、幕末維新の異常な平田神道の波及にもメスを入れなければならない。近世仏教史の流れも俎上にのぼる必要がある。寺院と神社の関係、儒学と国学と仏教の関係、寺領や戸籍の問題、幕末の宗教政策の問題、王政復古の内情も、もっと見なければならぬ。

その後、廃仏毀釈は収まった。それでもいったん施行された神仏分離令がのこしたシステムは、そのまま国家神道として機能しつづけた。しかも、これもまた大問題なのだが、こうした神仏分離と廃仏毀釈についての研究や批判が、あまりにも少ないのだ。まるでこの問題に触れるのがタブーであるかのような、意図的で不気味な沈黙すら感じられる。

神仏分離・廃仏毀釈は岩倉具視や木戸孝允や大久保利通からすれば、王政復古の大号令にもとづく「日本の神々の統括システム」を確立するための政策の断行だった。薩長中心の維新政府からすれば、神権天皇をいただいた国体的国教による近代国家をつくるための方途だった。

が、これはあきらかに仏教弾圧だったのだ。仏教界からすればまさに「排仏」であり、もっとはっきりいえば「法難」あるいは「破仏」なのである。

神と仏の切り分け

さて、仏と神の切り分けが行われたのは、1868（慶応4）年3月以降、明治新政府による法令の布告という形で、矢継ぎ早に実施されていきました。1868（明治元）年10月までに断続的に続けられた一連の12の布告の総称を、「**神仏分離令**」と呼んでいます。

3月13日、以下のような太政官布告によって神仏分離の火蓋が切って落とされました。

「此度（このたび）王政復古神武創業ノ始ニ被為基（もとづかせられ）、諸事御維新、祭政一致之御制度ニ御回復被遊候ニ付テハ、先（まず）第一、神祇官御再興御造立ノ上、追々諸祭奠（さいてん）可被為興儀（おこさせらるべき）、被仰出（おおせいでされ）候、……」

この太政官布告の内容は要するに、これからの日本は、古代（法令では、神武天皇がこの世に現れたときと定義）に、政治上の君主と宗教上の司祭者とが同一であったような祭政一致体制をめざすという内容である。そして、神祇官を復活させ、各神社や神職らは神祇官のもとに置く、ということです。

神祇官って何でしたか？

古代の律令制のもとでの、祭祀を司る官庁のことですね。つまり、神社は宗教の枠組みから外され、国家機関として機能させていく方針が定められたこととなります。「神は国家なり」ということです。神祇官は1869（明治2）年7月に置かれました。

1868年3月17日には、神祇官事務局から各神社に対し、以下の通達が出されました。

「今般王政復古、旧弊御一洗被為在（あらせられ）候ニ付、諸国大小ノ神社ニ於テ、僧形ニテ別当或ハ社僧抔（など）ト相唱ヘ候輩ハ復飾（ふくしょく）被仰出（おおせいだされ）候……」

ここで注目すべきキーワードは、「復飾」です。復飾って何でしょうか？聞きなれない言葉ですね。

「復飾」とは、僧侶の還俗（僧侶をやめて俗人に戻ることを）をさす言葉です。

あなたは、「社僧」とか「別当」とかの言葉を聞いたことがありますか？

江戸時代まで大規模な神社には、「社僧」と呼ばれる僧侶が従事していました。そして、神前で読経などの儀式をしました。

さらに、「別当」とは宮司（神宮司）における責任者のことです。本通達では社僧や別当に対して還俗を促した上で、神社に勤仕するように命じたのです。

昨日今日まで仏教者であった人間が、明日からいきなり宗教を変えて神職になれ、というのはあまりに乱暴なやり方ですよ。

そんな乱暴な仕打ちに対して全国の僧侶たちは、当然のことながら激しい抵抗を見せました、と言いたいところですが、現実には違っていました。

予想に反して、多くの僧侶はほとんど抵抗することもなく、神職に職替えをしたのです。えーっ、ほとんどの僧侶は抵抗をしなかったのですって?! なんで?? と思いませんか?

僧侶も「現実的」なんでしょうか? 現代日本でも流行っている? 「忖度(そんたく)」したのでしょうか? なにせ、新政府に逆らっても自らの立場を危うくしますよね。

それとも、神も仏も一緒だった(神仏習合)のだから、「仏に仕えていようが神に仕えていようが、同じことで問題なんかない」と割り切ったのでしょうか。ここが不思議といつか、私には信じられないのです。

だってそうでしょう。浄土宗や浄土真宗、日蓮宗など鎌倉新仏教の開祖や僧侶たちが、信仰を守るために権力者に弾圧されても戦ってきました。加賀の一向一揆などでは100年近くにもわたり一向宗門徒たちが「独立国」を作り上げました。織田信長に対して一向宗門徒たちは命がけで戦いました。江戸時代でも島原の乱では多くのキリシタンが戦いました。

それが、ほとんどの僧侶が何の抵抗も見せず、政府の言いなりになったというのが、わからない、といつか信じられないのです。江戸時代260年もの間、戦争がなかったから「平和ボケ」したんでしょうか? 不思議以外の何物でもありません。

話を元に戻しましょう。同月28日の太政官布告では、より具体的な神仏分離の内容が出されました。この28日の太政官布告は俗に、「**神仏判然令**」と呼ばれています。「判然」というのは「はっきりと区別する」という意味です。

この「神仏判然令」では、神社における仏教的要素の排斥を命じています。たとえば「**権現(ごんげん)**」「**牛頭(ごず)天王**」などの仏教由来の神号を禁止しました。

「**権現**」とは**仏が神の姿となってこの世に現れたもの**を意味し、有名なのは「東照大権現」で、徳川家康のことですね(亡くなって神様になったのです)。

また、「**牛頭天王**」とは**インド仏教の聖地、祇園精舎の守護神**で、現在の京都八坂神社が祇園社と呼ばれていたころ祭神とされていました。

江戸時代までの日本では、神社に附属して置かれた寺院である神宮寺(宮寺)では、仏像を神体にして祀ったケースが多かったのです。しかし、それらを神鏡などの神体に取り替えるよう命じられました。

仏具である鰐口(賽銭箱の上に吊り下げられている打ち鳴らす鐘)や、梵鐘(ぼんしょう)などもすべて取り除け、と命じられました。

このように江戸時代までは、神社の中に仏教由来のものが祀られていたり、寺院の中にも神社が祀られていたり、神と仏がごちゃ混ぜになっていました。

このことは、明治新政府側から見れば、徳川幕府時代の宗教形態が旧態依然として残っていて許しがたいことでした。新国家樹立にあたっては、天皇を中心とする祭政一致体制

が求められたのです。そのためには、神と混じり合っていた仏教は「異物」に他ならず、それを明確に切り分ける（判然とする）ことが必要だと考えていたのですね。

神仏習合とは

「神仏」を「分離」させたということは、それ以前は「神仏」が「1つ」に「融合」していたということです。それを「神仏習合」と言います。

ところで、あなたは神社と寺院、仏教と神道の区別がつかますか？拍手を打つのは神社ですか、お寺ですか？神社ですよ。

現在では、神道の宗教施設を「神社」、そして仏教の宗教施設を「寺院」と言って区別します。でも、明治維新の前、つまり江戸時代までははっきり区別されていなかったのです。神社の中に寺院はあり、寺院も神道の神様を祀っていました。

そもそも神様と仏様って違いますよね？神道は日本土着の信仰を土台に出来上がったものですが、仏教はインドで誕生し中国・朝鮮を経て日本に入ってきた外来の宗教です。

神社には素戔嗚尊（スサノオノミコト）や天照大神（アマテラスオオミカミ）などの神様が祀られています。菅原道真や徳川家康などの実在の人物も神様として祀られています。そして神主や巫女が仕えています。

寺院には釈迦如来像や阿弥陀如来像、観音菩薩像などの仏像が置かれ、僧侶が読経をあげたりしています。

もともと別の宗教だったものが、ある時から神様と仏様が1つに融合し、神社と寺院の区別が無くなってしまいました。その歴史が1000年ほど続いてきました。そのあたりのことを見ておかないと、「神仏分離」や「廃仏毀釈」の荒っぽさ、歴史上まれにみる暴挙、とんでもない過ちだというのが見えにくいと思います。

神仏習合の具体例

そもそも神仏習合ってどんな状況なのか、具体的に見ていきましょう。

「鳥居」ってわかりますか？鳥居は神社にあり、「ここから先は神域です」ということ

を表します。しかし、現在でも、お寺に鳥居があるところがあります。

例えば、奈良県生駒市の聖天様を祀る真言宗の仏教寺院に**宝山寺**があり、そこには鳥居があります。聖天様とは、大聖歓喜天(歓喜天)という仏教の神様(天部)のことで、神道の神様ではありません。

ところが、宝山寺には現在でも、山門の前に立派な鳥居がありますし、ご本堂の前にも鳥居があり、さらに山を登り、奥の院本堂に向かう途中には五社明神という神様を祀る祠もあります。

逆に、神社の境内にお寺があるのが世界遺産**日光東照宮**です。日光東照宮(神社ですよ)の中には本地堂(薬師堂)という建物があり、薬師如来という仏像を祀っています。

京都の神社と言えば、外国人観光客の多い伏見稲荷大社があります。ここには、「お稲荷様」が祀られていますが、実は「神道の神様」と「仏教の神様」がいらっしやいます。神道のお稲荷様は宇迦之御魂神(ウカノミタマノカミ)等、そして仏教のお稲荷様は荼枳尼天(ダキニ天)と言います。

伏見稲荷大社では明治までは、境内に宇迦之御魂神(ウカノミタマノカミ)を含む稲荷神をお祀りし、さらに境内の寺院があって荼枳尼天(ダキニ天)もお祀りしていたのです。

神仏習合の歴史

上記のような事例は日本国中、いたるところで現在も見られます。では、いつ頃から神仏習合という特殊な信仰形態を持ち、なぜそれらが起きたのか、簡単に歴史を振り返ってみましょう。

仏教が日本に伝わるまでは、自然崇拜(アニミズム)を中心とする信仰がありました。仏教は公的には6世紀半ばに朝鮮百済からもたらされました。外来宗教であった仏教ですが、蘇我氏が仏教を重要視し、**厩戸王(聖徳太子)**が仏教への帰依を深めていくなかで徐々に広まります。古墳に代わって**氏寺**が「権力の象徴」となりました。

ここで質問です。仏教が日本に公式に仏像・経典などが伝わったのは538年(または552年)のことですが、**朝鮮の百済の何王が日本の何天皇に伝えたのでしょうか？そして、この後「崇仏論争」が起き、最終的に蘇我馬子・厩戸王(聖徳太子)側が勝利しますが、敗北した人物は誰でしょうか？**

百済の聖明王が欽明天皇に伝えました。そして、蘇我馬子に滅ぼされたのは物部守屋で

したね。ちなみに、聖徳太子は戦いの前に、四天王という仏教の神様に戦勝祈願をして勝利したあかつきには寺院を建立すると誓願を立て、日本で初めての勅願寺院の**四天王寺**が建立されたことは有名ですね。

こうして飛鳥時代から奈良時代にかけて、仏教は「**鎮護国家**」という言葉に表されるように国家仏教の中に組み込まれ、それ以降、**国分寺・国分尼寺**や**東大寺**などが造営されていきました。

さて、神仏習合という概念がいつから始まったのかということですが、神仏習合は奈良時代以降に神宮寺の建立や、八幡神を勧請した仏教の国家的大事業「大仏造営」などで日本各地で見られるようになり、平安時代に神仏習合を理論的に説かれるようになったようです。

神仏習合の歴史上重要な神様が八幡神で、八幡神を祀る総本宮の**宇佐八幡宮**は6世紀、国東半島付け根に立つ御許山（標高647m）山麓に開山されます。九州北部のあたりでは、古くから土着の信仰と仏教の信仰が混ざり合ったものがあったと考えられます。

では、**なぜ神仏習合が起きたのでしょうか？なぜ土着の神道と、外来の仏教が融合することができたのでしょうか？** その理由と考えられることがいくつかあります。

その1。もともと**仏教が他の宗教の神様や信仰と融合する柔軟性を持っていた**、というもの。

その2。「民衆の願いを叶える救済や、民衆を救う」という**大乘仏教の性格は日本の民間・朝廷で信仰されていた神様への信仰と合致した**、というもの。

その3。先進的な文明を学んでいた朝鮮から持ち込まれた仏教の思想や文化に対して**日本の朝廷・寺社などが抵抗する力がなかった**、というものです。

どの説が正しいのか、ここでは深入りしないでおきます。

本地垂迹説

平安時代に入ると、**本地垂迹（ほんちすいじゃく）説**という**神仏習合**思想が生まれます。

「**本地垂迹説**」とは何でしょうか？

「**本地**」とは「**本来の姿**」、そして「**垂迹**」とは「**変化をした後の姿**」とされます。つまり、本地垂迹とは「**仏様が本来の姿で、日本の神様は化身（変身した後の姿）**」である、ということの意味します。

仏様は人々を救ってくださるありがたい存在ですが、救ってくださる時には、人に近い

存在となって現れて救ってくださるということなんです。「人に近い存在」が、日本の場合では神道の神様であったということです。

本地垂迹説は天台宗や真言宗などの密教において体系化され、**天台宗の山王神道**や**真言宗の両部神道(両部習合神道)**などが有名です。

わかりにくいでしょうか？例えば、日本には天照大神という神様がいますが、本当の姿（本地）は大日如来なんですよ、という考え方です。日本で一番多い神社が八幡宮だといわれますが、八幡神の本当の姿は阿弥陀如来ですよ、ということなんです。

他にも、日光東照宮の「東照大権現」という神様ですが、実は江戸幕府を開いた徳川家康が神様として祀られています。徳川家康は死後に、戦国の乱世を終わらせ太平の世の礎を築いたことから神号の「東照大権現」の名を贈られたんです。

この「権現」という言葉は本地垂迹説に則ったもので、仏様が神様としてこの世にご利益を与える姿で現れたときに使われる言葉です。ここでは、薬師如来という「本地」が、徳川家康という「垂迹」として現れ、「権現」という神道の神様として祀られるようになったのです。

こうして、本地垂迹説では、神道が仏教の下位であるように捉えられる**仏教優位**の考え方が広まります。

その結果、神社の神殿に仏像が祀られるようになったり、神宮寺・別当寺などという形態で、神社に付随する寺院も増えていきます。そこに住持する社僧も現れました。

それに対して登場した考え方が、神本仏迹説（反本地垂迹説）と呼ばれる考え方です。それが伊勢神道や**吉田神道**と呼ばれるもので、簡単に言えば、「神様が最も重要」ですという考え方です。その際に「**明神・大明神**」という言葉が吉田神道などでは重要視されません。

権現という「仏様の仮の姿としての日本の神」に対して、優れた神様を表現する「明神」という言葉が使われるようになったのです。

たとえば、豊臣秀吉は死後「**豊国大明神**」という神号を贈られました。これは吉田神道側の働きかけによって実現したそうです。

ちなみに、豊臣秀吉・織田信長が活躍した時代は「**天道思想**」と言い、神も仏も一緒に、この世は天の下にあり、「天道」というこの世の道理にかなうことをするのが大事だと考える風潮が広まり、神道も仏教も多くの武将に信仰されています。

織田信長は比叡山延暦寺を焼き討ちし、石山本願寺とも闘ったため「神も仏も恐れなかった」と言われますが、実は違います。延暦寺の焼き討ちは、仏法に帰依などせず修行を怠り私腹を肥やす僧兵を困っていた延暦寺は仏法に背いていると考え、天道に背いた罪として信長は正義の鉄槌を加えたのでした。

さて、鎌倉時代から江戸時代までは、仏教は武家社会に庇護される形で興隆していきました。特に江戸幕府がキリシタン禁制を目的に**檀家制度**や**本山末寺制度**を作ったことによって、寺院や僧侶はムラ社会における確固たる地位を築きます。

そうして既得権益に守られた仏教は、神道より立場が上、優位という状態となりました。神社を支配下に置き、僧侶が神官たちを虐げるということも、しばしば起きたようです。

全国でも、神社と寺院が混じり合った宗教施設があちこちに出現します。先ほど紹介した寺社以外にも、京都の八坂神社、愛宕神社、石清水八幡宮、奈良の春日大社、伊勢の神宮などに至るまで、全てに仏教（寺院）的要素が入り込み、社僧が運営や儀式に至るまで権限を振るっていきます。日本国中「神仏習合が当たり前」という状況だったんです。

ところが、17世紀に入ると、仏教の支配的構造に異論を唱える学説が登場します。それが**国学**です。国学とは『古事記』『日本書紀』などの古典研究を基に、古来の神道に理想を求めます。国学では仏教は所詮、外来宗教という位置づけてした。

本地垂迹説は否定され、国学思想は幕末の、諸外国による開国要求とも相まって、攘夷を掲げる武士層や虐げられてきた神官にとっての、精神的支柱となっていくます。

水戸藩では、国学と儒学、史学などを結合させた独自の学問である水戸学を立ち上げます。明治新政府よりも早く、**廃仏毀釈**が行われていました。

その先駆けが、「水戸黄門」で有名な第二代藩主**徳川光圀**です。光圀は、17世紀半ばに、藩内寺院の破却や僧侶への還俗命令などに着手しています。この時の水戸藩の「**廃仏毀釈**」の特徴は、民衆運動としての破壊行為ではなく、**無秩序に増えすぎた墮落寺院の統廃合**にありました。いわば、**寺院と僧侶の「リストラ」**を断行したのです。

リストラされた寺院は、宗旨人別帳を管理せず、葬祭を実施しないような寺院でした。ですから、きちんとした縁起をもち、一定規模の寺院で寺檀制度に組み込まれた寺院は、破却対象にはなりませんでした。

ですから、明治維新時に起きた廃仏毀釈とは違って、あくまでも「自墮落」な寺院の整理を目的としたのが特徴です。この時の寺院整理で、1098ヶ寺が処分（破却率は46%）されたそうです。

水戸藩での廃仏毀釈は、さらに、幕末の第9代藩主**徳川齊昭**（江戸幕府最後の将軍徳川慶喜の父）の時代にも起きています。

齊昭は「院号・居士・大姉」など位の高い戒名を金銭で売買する風習を禁止します。また、火葬は仏教的な葬送であり、神道の考え方では土葬が本来だとして**火葬禁止令**を出しています。

さらに、斉昭は梵鐘や仏具類などの没収を手始めに、寺院の破却、僧侶の削減などの本格的な廃仏毀釈に着手していきました。**斉昭の廃仏政策は、光圀と違って本格的な仏教排斥が特徴です。**

主たる目的は、寺院が有する仏像や梵鐘などの金属を供出させることでした。藩内で集められた什物類の種類と数は梵鐘が323、半鐘が265、鰐口が301などで、これらから大砲などが造られたのです。

こうして、斉昭の時代には、藩内寺院計190ヶ寺が処分されました。宗派別では真言宗が86ヶ寺と全体の45%に及んだそうです。

光圀と斉昭の「改革」の大きな違いは、**光圀が由緒ある名刹古刹を保護したのに対し、斉昭はむしろ大寺院に狙いを定めて破却を実施**している点です。破却の実数こそ光圀時代の方が多くですが、情け容赦ない廃仏毀釈はむしろ斉昭時代に実施されました。

水戸から全国へ

大河ドラマなどでも出てきますが、水戸藩主徳川斉昭は当時幕府から疎まれていました。その理由の1つが、斉昭の「廃仏毀釈」だったようです。

どういことでしょうか？

幕府はキリシタン排斥のために、寺檀制度を敷いていました。村人は全て村の寺の檀家になり、家族構成などの個人情報を、宗旨人別改め帳によって管理されていました。寺院は戸籍を作成する重要な役割を担っていたのです。

斉昭が寺院を「整理」していけば、戸籍管理ができなくなってしまいます。したがって、斉昭の「寺院整理」は、幕府の側からすると、幕藩体制の否定ともとれる暴挙に映ったのです。

ですから、幕府は斉昭に対して謹慎処分を命じています。斉昭の仏教に対する一連の迫害行為があまりにも急進的であったため、幕府が警戒したのですね。

ところが、斉昭が実施した寺院整理による金属供出の考え方は、明治に入って、他藩の富国強兵政策に移植されていきます。とくに、激的な廃仏毀釈を展開した薩摩藩では、水戸藩の事例にならって、仏像や仏具が武器製造や鑄銭のために溶かされていきます（薩摩の事例はのちに詳しく見ていきます）。

いずれにしろ、水戸藩で行われた廃仏政策は、時間と場所を変え、維新時に大きなうねりとなって日本全体を包んでいくこととなります。

仏教破壊が始まる！

話を「廃仏毀釈」に戻しましょう。そもそも、**廃仏毀釈**という仏教破壊の嵐は、いつごろ、どこで始まったのでしょうか？そして、**どんな人たちが寺院や仏像を破壊したのでしょうか？**

その場所は京都からほど近い、**大津**です。京都から見ると比叡山を越えて滋賀県側に下った場所、**大津坂本の日吉大社**です。**ここで廃仏毀釈という仏教破壊の大きな波が起こったのです。**



日吉大社山門

西本宮楼門



仏教破壊は日吉神社から

そのあたりのことを、『**仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか**』で確認しましょう。

廃仏毀釈の最初の大きなアクションは、**仏教の一大拠点であった比叡山の麓の日吉大社（滋賀県大津市坂本）**で起きた。日吉大社は全国に3800以上の「日吉」「日枝」「山王」と名の付く神社の総本宮である。・・・

日吉大社は平安京の表鬼門（北東）に位置することから、**災難除けの神様**として古くから崇拝されてきた。だが、**伝教大師最澄**によって比叡山延暦寺が開かれてからは、その勢力下に置かれることになる。日吉大社は延暦寺の守護神として位置づけられた。

いわば、仏を神が護るという上下関係が出来上がり、日吉大社は延暦寺に支配されていく。そして、僧侶によって神官らは虐げられていたのだ。

折しもそこに神仏分離令が出される。そこで、積年の恨みとばかりに神官達は徒党を組んで社から僧侶を追い出し、仏像仏具を毀し始めた。これが後に全国に波及していく廃仏毀釈の最初であった。

それは3月28日の太政官布告から、わずか4日後の4月1日のことであった。40数人規模の武装した神官達が、「神威隊（しんいたい）」を名乗って、日吉大社に乱入した。

・・・神威隊は、本殿になだれ込み、祀られていた仏像や經典、仏具などに火を放った。その数、124点に及んだ。鰐口や具足、華籠（けこ）などの金属類48点は持ち去られた。焼き払われた仏像は本地仏の他に阿弥陀如来、不動明王、弁財天、誕生仏など。經典のなかには600巻になる大般若経や法華経、阿弥陀経等が含まれていた。

暴徒の中には、社司から雇われた地元坂本の農民100人が含まれていたとされる。当時、坂本の地は延暦寺が支配しており、小作人達は重い年貢を背負われていた。江戸幕府の庇護のもと、長年にわたって既得権益を握ってきた延暦寺に対する地元民の反感は、神官同様に燻（くすぶ）り続けていたと察することができよう。

なんと「神仏判然令」が出てからわずか4日後に寺院や仏像破壊に走っているのです。**廃仏毀釈の中心人物は比叡山延暦寺の僧侶に虐げられてきた日吉神社の神官たち。**そして彼らと一緒に、**延暦寺から重い年貢を課せられていた坂本の農民たち**も仏像破壊などの蛮行に加わっていたのです。

神官にしても農民にしても、延暦寺や僧侶に「恨み骨髓」だったというわけです。江戸時代は約260年続きましたが、その間、神官は僧侶に虐げられ、農民は延暦寺から骨の髄まで搾り取られて来た、ということで恨みが溜まりに溜まっていたというのが背景にあったということなんですかね。

『**仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか**』の続きを見てみましょう。

坂本で始まった廃仏毀釈の動きは、彼の地だけで終息することはなかった。日吉大社の暴動は宗教クーデターの様相を呈し、瞬く間に全国に知れ渡ることになる。そして、波状的に各地に広がり、全国で廃仏毀釈運動が展開されていくのである。

この日吉大社の暴動に強い衝撃を受けたのは他にもない、神仏分離政策を推し進めた当事者、明治政府であった。

長年、僧侶から虐げられてきた神官の逆襲に燃える気持ちは尋常ではなかった。それが大衆をも巻き込み、熱狂的な破壊活動にまで発展したことは、新政府にとって想定外であった。

新政府は日吉大社の暴動からわずか9日後の4月10日、・・・太政官布告を出し、神職らによる仏教施設の破壊を戒めている。・・・・・・

この太政官布告からも神仏分離政策が神官や市民の間で拡大解釈され、コントロール不能な状況になりつつあることが読み取れる。

新政府としては、王政復古、祭政一致を保つためには神と仏の分離は推し進めなければならぬ。しかし、分離政策はあくまでも粛々と行いたかったのである。

明治新政府にとって廃仏毀釈の嵐は「想定外」のことだったので。荒ぶる神官や民衆の「火の手」を制御できない新政府が「なんでやねん」と戸惑っている様子がうかがえます。

先ほど、「**廃仏毀釈の中心人物は比叡山延暦寺の僧侶に虐げられてきた日吉神社の神官たち**」、そして彼らと一緒に、「**延暦寺から重い年貢を課せられていた坂本の農民たち**」が仏像破壊などの蛮行に加わっていたと書きました。

この人たちが「神仏分離」や「廃仏毀釈」を「実行に移した」のは間違いありませんが、この人たちを「先導した」人は誰なのでしょう？つまり、「神仏分離」や「廃仏毀釈」を日本全国で実施させようとした人々はどんな人なのでしょう？

通達や命令を出したのは神祇官と神祇科でした。慶応4年が明けて間もなく前年の12月の小御所会議に基づいて発せられた「王政復古の大号令」を受け、明治新政府は太政官のもとに七科を設置しました。その中に神祇科があったのです。

神祇事務総督に中山忠能（ただやす）らが任命され、そのもとに平田鉄胤（かみたね）などの平田派・大国派の国学者や神道家たちが登用されます。その結果、神道国教主義の構想が浮上しました。

ここで、質問です。**近江坂本**といえば、日本史にも出てくる場所ですね。**1428年（室町時代）、近江坂本の〇〇たちが蜂起し、京都の△△や□□や◇◇を襲いました。〇〇に入る言葉（職業）や△△や□□や◇◇に当てはまる言葉は何でしょう？**

そして、この一揆を何といいますか？

また、この時は「代始め」でしたが、亡くなった将軍及び新しい将軍となった人物は誰でしょう？

〇〇に入るのは「**馬借（ばしゃく）**」です。

この一揆の名前は「**正長（しょうちょう）の徳政一揆**」ですね。一揆衆は徳政（借金の帳消し）を求めますが、幕府は徳政を認めませんでした。襲った場所は「**酒屋・土倉・寺院**」などでしたね。

「代始め」については、**5代将軍足利義量（よしかず）**が亡くなり、**6代将軍足利義教（よしのり）**が将軍になった時のことでした。

本日はここまでです。次回は日吉大社で始まった廃仏毀釈が日本各地に拡大していきます。明治新政府の中心である薩長両藩の様子はどうだったのか？また、奈良や京都には大寺院がありますが、どのような状況だったのかを見ていきます。

今回もお読みいただき、ありがとうございます。